



映画上映の後に開かれたシンポジウム＝西宮市で

ハンセン病シンポと映画上映 「現代につながる問題」

西宮

ハンセン病問題を考える映画上映とシンポジウム（ハンセン病問題を学ぶ市民の会主催）が17日、西宮市松原町の市立勤労会館であった。

映画は、ハンセン病の隔離政策に反対した小笠原登医師（1888～1970年）を描いた「一人になる」。ハンセン病を巡る戦前戦後の状況や小笠原医師の生涯を元患者らの証言などで丹念にたどる。小笠原医師は愛知県あま市にある真宗大

谷派円周寺に生まれ育ち、進学した京大医学部の皮膚科特別研究室でハンセン病の診療にあたった。伝染性が弱い病気だとして、隔離政策に反対。患者を守るため診断書に別の病名を記し、差別から職を失いそうな患者家族の職場や近所を説得したことも描かれる。

この映画の監督、高橋一郎さんは6月、大阪市内のシンポの席上で倒れ、心筋梗塞のため67歳で急逝した。

この日のシンポでは進行役の大府済生会ハンセン病回復者支援センターの加藤めぐみさんが高橋監督の思いを紹介した。小笠原医師の同調圧力に屈しない姿勢と患者・家族に寄り添う医療に学ぶべき点があること、問題の基調にある優生思想は今なお残っていることから「ハンセン病問題はまさに現代とつながっている」と高橋さんが指摘したという。ハンセン病家族訴訟の原告団副団長を務め

た黄光男ワウケウオさんは「おかしなことに声を上げる勇氣を持つことが大事」とし、「誤った情報を信じた市民も、自身に加害責任があるかもしれないと考えなければいけない」と話した。

映画は11月20日～12月3日に大阪市西区のシネ・ヌーヴォ、11月26日～12月2日に宝塚市売布のシネ・ピピアでも上映される。

【亀田早苗】